

「幼児期の家庭教育国際調査」
日本・中国・インドネシア・フィンランドの母親を対象に

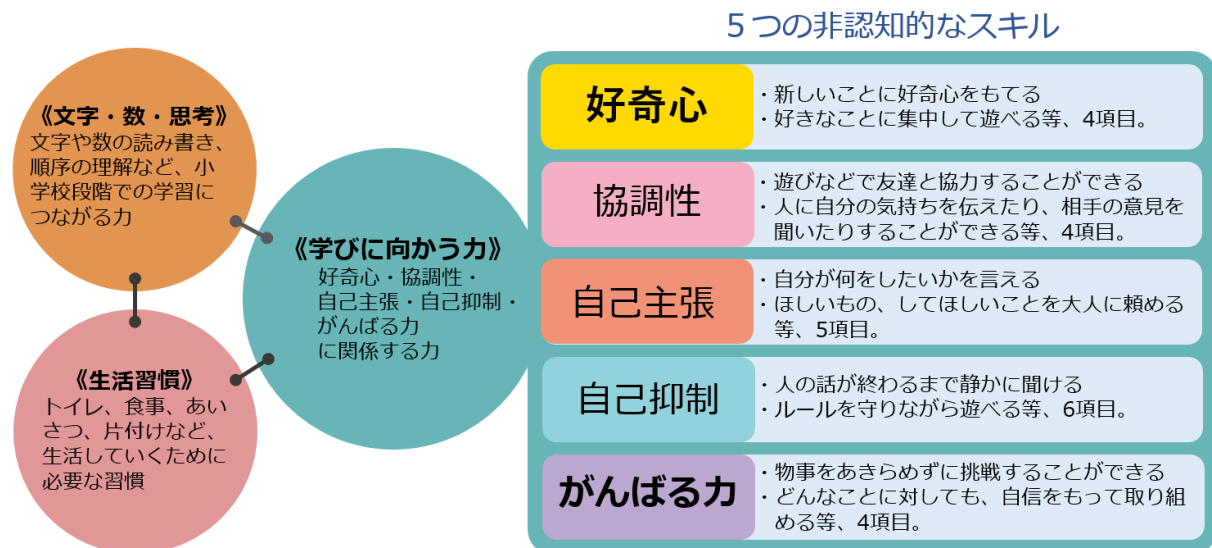
**小学校入学に向けて育みたい《学びに向かう力》は各国共通の5領域
—「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」—
「寄り添い型養育態度」が《学びに向かう力》の発達と関連**

株式会社ベネッセホールディングス（本社：岡山市）の社内シンクタンクであるベネッセ教育総合研究所は、2017年に、アジア3か国とフィンランドの都市圏で、幼児期の子どもを持つ母親を対象に「幼児期の家庭教育国際調査」を実施しました。本調査は、母親の子育て意識・実態や、小学校入学に向けて幼児期に育みたい力として設定した《学びに向かう力》《文字・数・思考》《生活習慣》の発達状況と保護者のかかわりについて、国による違いや共通点を明らかにすることを目的にしています。今回の調査では、日本と同じアジア圏より、経済的な成長が著しく、日本と同様に幼児教育の中で非認知的なスキルを重要視している中国、多様な民族が融合しているインドネシア、アジア圏との比較のためにヨーロッパ圏からフィンランドを対象にしました。本リリースでは、小学校入学に向けて育みたい力のひとつである《学びに向かう力》について取り上げています。

《学びに向かう力》の解説と調査の主な結果は、以下の通りです。

《学びに向かう力》について：

ベネッセ教育総合研究所では、幼児期に育みたい生涯にわたって必要な力、小学校入学以降の学習や生活につながる力として、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」の5つの非認知的なスキルを《学びに向かう力》として定義しました。ベネッセ教育総合研究所では、2012年より《学びに向かう力》の縦断研究（「幼児期から小学生の家庭教育調査」）に取り組み、幼児期の《学びに向かう力》が、「言葉」などの認知的なスキルの土台となることを明らかにしています。



【調査の主な結果】

1. 小学校入学に向けて育みたい力のひとつである《学びに向かう力》は、社会文化的な環境が異なるにもかかわらず、4か国で共通の5領域—「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」—で構成されていることがわかりました。
2. 《学びに向かう力》の5項目の内、いずれの国でも、「好奇心」の得点がもっとも高い傾向。一方で、「がんばる力」や「自己抑制」は、得点が低い傾向がありました。

3. 《学びに向かう力》や、《生活習慣》などの自立にかかわる力の育成を子育てにおいて重視する傾向も各国共通しており、どの国でも8～9割の母親が「力を入れている」と回答。
4. 母親の「寄り添い型養育態度」が、いずれの国でも「好奇心」や「がんばる力」の発達に関連しています。「好奇心」や「がんばる力」を育てるうえで、保護者のかかわり方が重要です。

【調査の背景と目的】

グローバル化やIT化など、国際的に社会環境の変化が加速する中で、既存の知識を身につけるだけでなく、環境に柔軟に適応し、学び続け、課題を解決しようとする姿勢や力が必要と考えられるようになってきました。そして、そのような姿勢や力を幼児期から育むことの重要性が、世界的に注目されています。

ベネッセ教育総合研究所では、この姿勢や力を《学びに向かう力》として、2012年より、年少期から毎年、国内で縦断調査を行ってきました。そのなかで、《学びに向かう力（非認知的スキル）》の形成のプロセスと、《生活習慣》や、《文字・数・思考（認知的スキル）》との相互影響の様子、保護者のかかわりの影響について明らかにしてきました。

2017年、研究対象を国外に広げ、社会文化的に異なる環境に暮らす幼児の《学びに向かう力》《生活習慣》《文字・数・思考》の発達と保護者のかかわりを把握することを目的に、日本・中国・インドネシア・フィンランドの都市部で調査を行いました。尺度は、2012年の国内調査（「幼児期から小学生の家庭教育調査」）で設計したものを、各国の文化・習慣に合うように留意しながら翻訳し、使用しました。また、幼児期の家庭での教育・養育の実態や、保護者の教育・育児意識も合わせて調査し、背景となる環境や意識の違いや共通点を把握しました。いずれの国も、各国の子どもたちが小学校に入学する月の1～3か月前に時期を合わせて調査を行いました。

【結果のまとめ】

今回の調査結果より、幼児期の《学びに向かう力》の形成については、どの国においても、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」の5つから構成されていました。そして、いずれの国も、母親の「寄り添い型養育態度」が、「好奇心」「がんばる力」等の非認知的スキルに関連する項目の発達と関連していることがわかりました。また、各国の母親の子育て方針についても、子どもの《学びに向かう力》や《生活習慣》に関連することを重視している傾向が共通してみられました。

グローバル化・IT化が急速に進む社会においては、異なる文化に対する「好奇心」、コミュニケーションの上では「協調性」や「自己主張」「自己抑制」、そして、困難な環境にあっても「がんばる力」といった、非認知的スキルがより重要であると考えますが、その力が、いずれの国の家庭においても、幼児期に共通して育まれていることがわかりました。また、その力の成長が、保護者の子どもの意思を尊重したり、子どものがんばりを見守る形で支援したりするようなかかわりかたと関連することは、国を超えた貴重な知見と言えると考えます。保護者や、幼児教育にかかわる方々にとって、本調査の結果が、各国でのよりよい幼児期の養育を考える際の示唆となることを願っています。

【調査概要】

名称	幼児期の家庭教育国際調査
調査対象	4歳～6歳（就学前）の幼児を持つ母親
調査項目	子どもの基本的な生活時間／メディアとのかかわり／習い事／母親の教育観・子育て観／子どもの将来への期待／生活習慣・学びに向かう力（非認知的スキル）・文字・数・思考（認知的スキル）／母親の養育態度・行動／教育・しつけの情報源／子育ての担い手／父親・祖父母の家事・育児参加／子どもと過ごす時間など。
調査監修 分析担当	調査監修：無藤隆（白梅学園大学大学院特任教授）／秋田喜代美（東京大学大学院教授）／一見真理子（国立教育研究所総括研究官）／榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、チャイルド・リサーチ・ネット所長）／荒牧美佐子（目白大学准教授） 分析担当：木村治生（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）／高岡純子（同研究所 主任研究員）／持田聖子（同研究所 研究員）／真田美恵子（同研究所 主任研究員）／久保木有希子（同研究所 研究員）／田村徳子（同研究所 特任研究員）

	日本	中国	インドネシア	フィンランド
調査地域	首都圏（東京駅から40 ^分 圏内）	北京市・上海市・成都市	ジャカルタ市他近郊4市	エスポー市他3市
調査時期	2017年3月	2017年6月	2017年5～7月	2017年6～7月
調査方法	インターネット調査	幼稚園通しの自記式質問紙調査	調査員の戸別訪問による聞き取り調査	保育園通しで配信されたインターネット調査
有効回答数	1,086名	2,778名	900名	180名
監修者	上表に記載	朱家雄（華東師範大学名誉教授） 周念麗（華東師範大学教授）	Sofia Hartati（ジャカルタ国立大学教授）	Risto Hotulainen（ヘルシンキ大学准教授）

【データに関する留意点】

- ・ 図表・文中では、国名を記載していますが、調査は各国の都市圏で実施しており、調査国全体の平均値を示すものではないことにご留意ください。（日本：首都圏、中国：上海・北京・成都、インドネシア：ジャカルタと近郊4市、フィンランド：エスポー他3市）
- ・ 中国、インドネシア、フィンランドは、地域性やサンプリングの影響で、世帯収入と母親の学歴が、平均より高い傾向があります。
- ・ 中国については、自記式質問紙調査のため、「無答不明」が生じていますが、分析に当たっては、設問ごとに「無答不明」を欠損値として除外して算出しています。

※本調査結果は、2018年3月18日、チャイルド・リサーチ・ネット主催「アジア子ども学交流プログラム第2回国際会議」（2018年3月17日～18日）でも紹介します。

<http://www.blog.crn.or.jp/crnasia-2017.html>

※2018年夏ごろ、本調査より、「母親のワーク・ライフ・バランス」に焦点をあてた分析結果を発信する予定です。

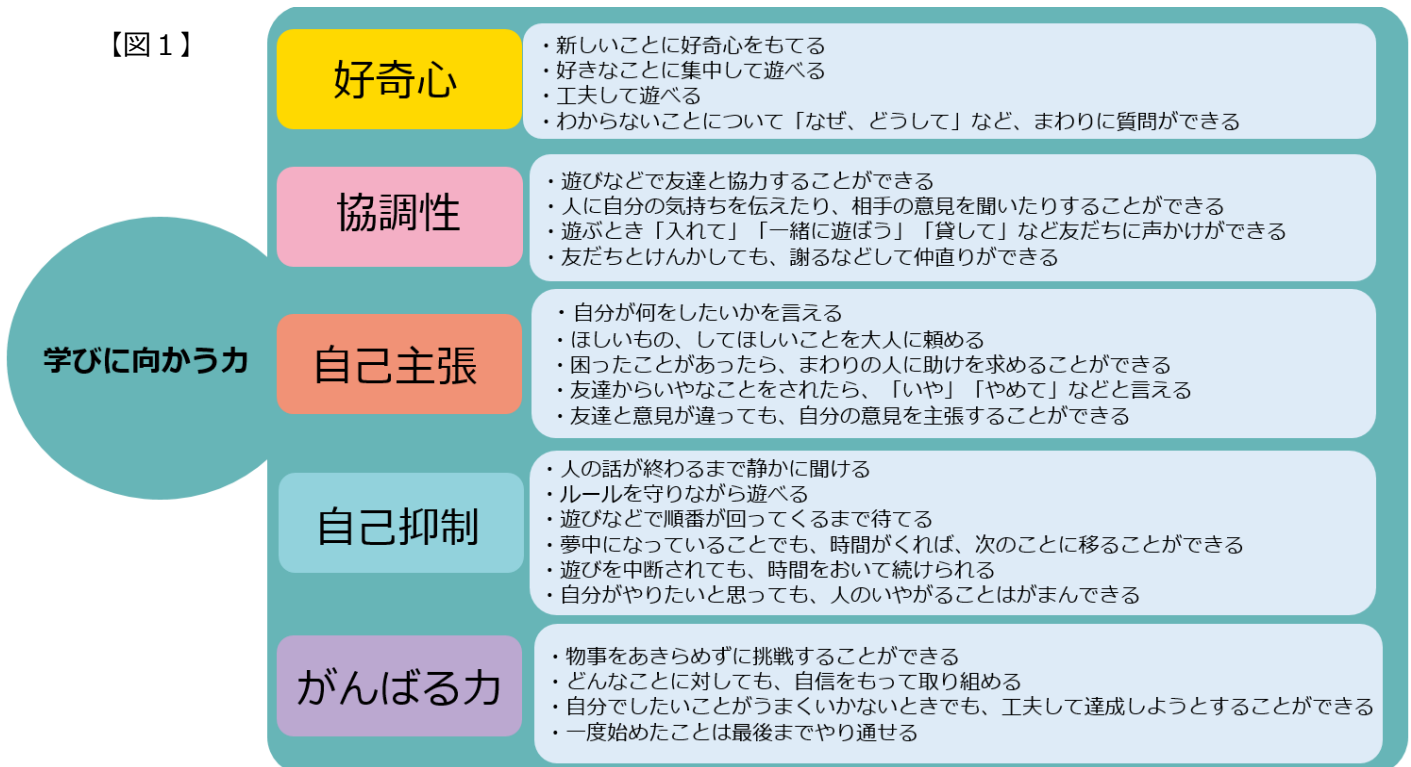
●ベネッセ教育総合研究所のホームページからも、本資料をダウンロードできます。

<http://berd.benesse.jp/>

【主な調査結果】

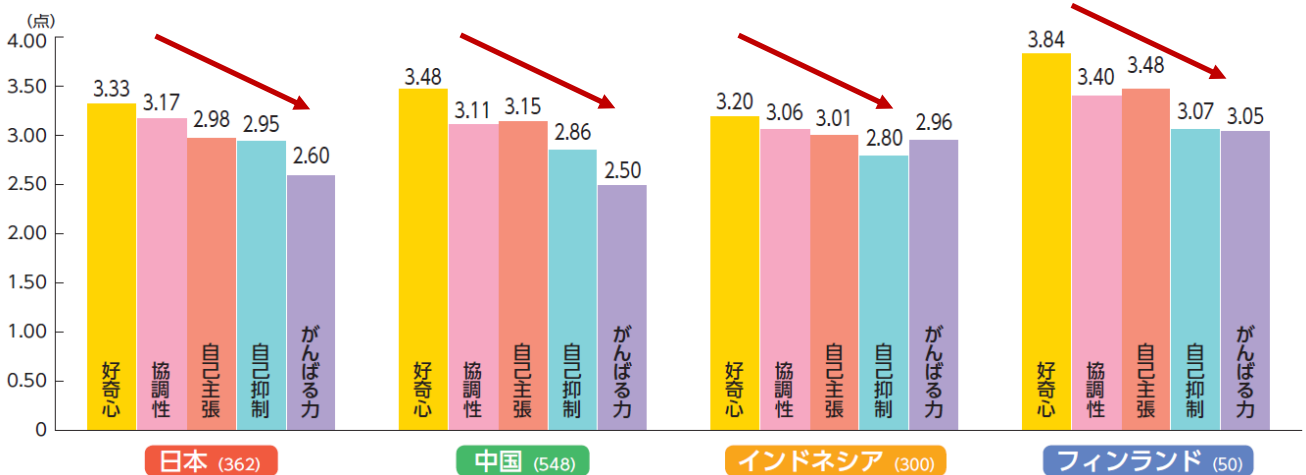
1. 小学校入学に向けて育みたい力のひとつである《学びに向かう力》は、社会文化的な環境が異なるにもかかわらず、4カ国で共通の5領域—「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」—であることがわかりました。

【図1】



2. 《学びに向かう力》の5項目の内、いずれの国でも、「好奇心」の得点をもっとも高い傾向。一方で、「がんばる力」や「自己抑制」は、得点が低い傾向がありました。

【図2. 幼児（6歳児時点）での《学びに向かう力》5領域の発達状況】



※各国の6歳児の「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」の各項目の合計得点の平均（4.0が満点）。「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「どちらともいえない」を2点、「あまりあてはまらない」を1点、「ぜんぜんあてはまらない」を0点として算出。

※「好奇心」は【図1】に示した4項目、「協調性」は【図1】に示した4項目、「自己主張」は【図1】に示した5項目、「自己抑制」は【図1】に示した6項目、「がんばる力」は【図1】に示した4項目。

※すべての項目に対して回答した人を対象とした。（ ）内はサンプル数。

3. 《学びに向かう力》や《生活習慣》などの自立にかかわる力の育成を子育てにおいて重視する傾向も各国共通しており、どの国でも8～9割の母親が「力を入れている」と回答しています。

- ▶子育てのなかで、力を入れていることをたずねたところ、「他者への思いやりをもつこと」「自分の気持ちや考えを人に伝えること」、「興味や関心を広げること」といった《学びに向かう力》に関連する項目は、8～9割が肯定（「とても力をいれている」+「まあ力を入れている」）。「自分でできることは自分ですること」「基本的な生活習慣を身につけること」「社会のマナーやルールを身につけること」といった《生活習慣》の自立に必要な能力は、すべての国で9割以上が肯定。
- ▶日本の母親は、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」や「外国語を学ぶこと」を重視する比率が、他国に比べて低い傾向にあります。

【図3.子育て方針】

Q：あなたは、どのようなことに力を入れて、対象のお子様を育てていますか。

(%)

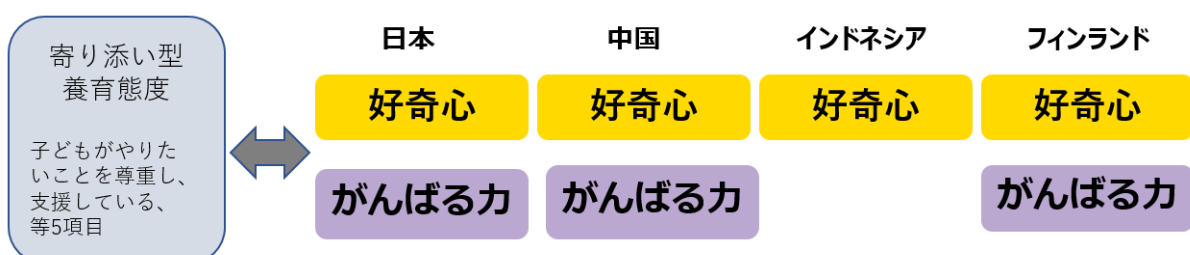
		日本	中国	インドネシア	フィンランド
《学びに向かう力》 に関連	他者への思いやりをもつこと	96.1	97.1	95.4	100.0
	自分の気持ちや考えを人に伝えること	94.4	94.8	95.5	98.3
	興味や関心を広げること	87.8	93.8	96.7	90.0
《生活習慣》 に関連	自分でできることは自分ですること	96.5	96.5	97.1	98.9
	基本的な生活習慣を身につけること	95.2	97.8	95.0	100.0
	社会のマナーやルールを身につけること	97.5	99.3	97.4	100.0
《文字・数・思考》 に関連	数や文字を学ぶこと	87.2	88.1	96.6	89.4
	伝統や文化を大切にすること	61.4	87.8	95.3	78.4
	芸術的な才能を伸ばすこと(音楽や絵画など)	46.3	85.9	78.1	72.8
	外国語を学ぶこと	38.4	81.5	79.4	52.8

※「とても力をいれている」と「まあ力をいれている」の合計 (%)。

4. 母親の「寄り添い型養育態度」が、いずれの国でも「好奇心」や「がんばる力」の発達に関連しています。「好奇心」や「がんばる力」を育てるうえで、保護者のかかわり方が重要です。

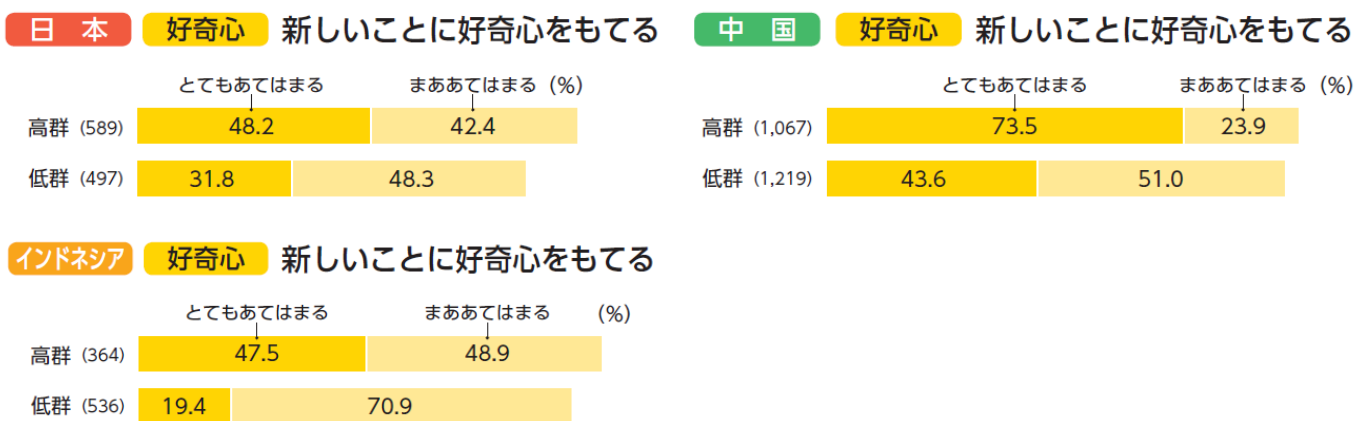
- ▶「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」「子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせようとしている」など、**子どもの意思や感情を尊重する保護者のかかわりを「寄り添い型養育態度」と定義**し、《学びに向かう力》との関連を調べました。
- ▶母親の「寄り添い型養育態度」は、日本・中国・フィンランドは「好奇心」「がんばる力」の発達と関連がみられました。インドネシアは「好奇心」の発達と関連がみられました。【図4-1】
- ▶つまり、母親が、寄り添い型の姿勢で子どもとかかわるほど、子どもは、新しいことに好奇心をもてる（「好奇心」の項目）【図4_2】、物事をあきらめずに、挑戦することができる（「がんばる力」の項目）【図4_3】といえます。

【図4-1】



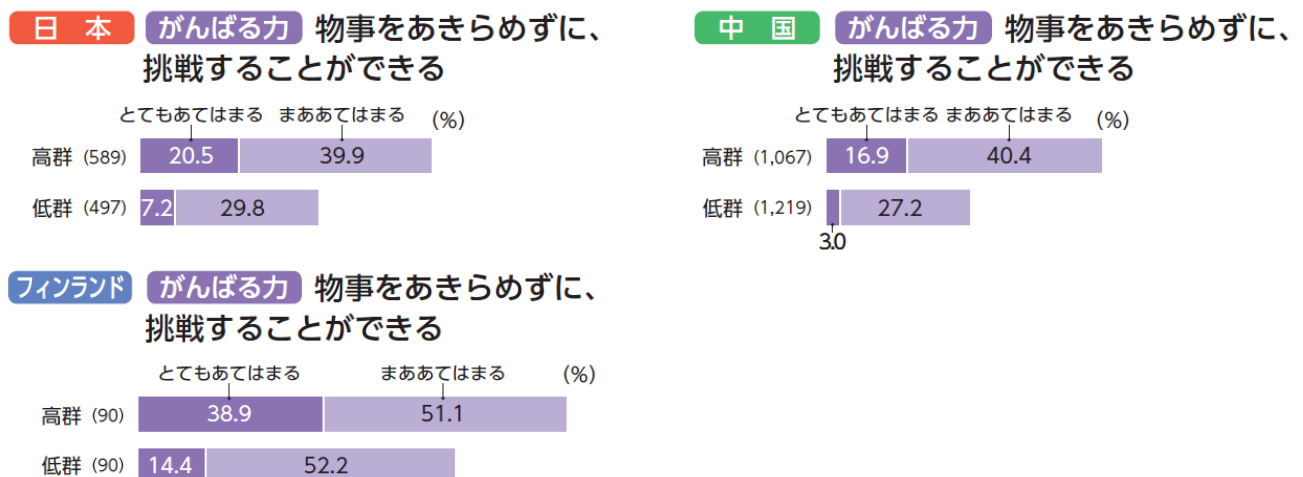
- ※ 4～6歳のデータ。二変量相関分析により、中程度（0.2～0.4）のプラスの相関がみられた。
- ※ 「寄り添い型養育態度」とは、「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」「子どもに対して否定的ではなく、前向きで積極的な態度をとるように心がけている」「しかるとき、子どもの言い分を聞くようにしている」「子どもが自分でやろうとしているとき、手をささずに最後までやらせるようにしている」の5項目から成る。
- ※ 《学びに向かう力》5領域のうち、もっとも得点の高い「好奇心」と、各国共通して得点の低い「がんばる力」のみを取り上げている。
- ※ すべての項目に対して回答した人を対象とした。

【図 4-2】「寄り添い型養育態度」の高群・低群と「新しいことに好奇心をもてる」（「好奇心」の項目）



※各国の「寄り添い型養育態度」について、得点（0～4点）の分布をみて、高低2群に分けた。

【図 4-3】「寄り添い型養育態度」の高群・低群と「物事をあきらめずに、挑戦することができる」（「がんばる力」の項目）



※各国の「寄り添い型養育態度」について、得点（0～4点）の分布をみて、高低2群に分けた。